

不安定な時代に「信じられるのは自分だけのセンス」

- ▶ 「センスがいい人」は、例外なく、上質なものに触れようとする習慣がある。いいものに触れることで美しいもの、価値があるものを見極める“審美眼”が養われるからである。
- ▶ もののよし悪しが判断できるようになると、生活や人生が豊かになるだけでなく、“本物”を見抜く力ができて、雑多な誘惑に惑わされなくなる。
- ▶ 人を感動させる質の高さは、一朝一夕にできるものではなく、また「違いのわかる」審美眼も、上質に触れる体験を重ねなければ身につかない、センスとは、そんなふううに体全体に蓄積したデータベースからの、感覚的なアウトプットなのである。
- ▶ 一流といわれる人のセンスは、天性のセンスではなく、計り知れない量の試行錯誤から生み出されたセンスである。仕事のスキルだけでなく一流の人には人格、気遣いなどが備わっていることもわかる。
- ▶ 20世紀の最も著名な喜劇俳優であるチャップリンの少年時代は、貧困と共にあった。貧民院や孤児院での生活も経験している。
- ▶ しかし彼には、どんなに苦しくとも、誇りうる原点があった。それは「母の心」である。それは「誇りをもて」と。
- ▶ 金も職もなく、道ばたで眠り、ロンドンの街を放浪した。あらゆる職業を転々としたという。しかし、「俳優になるという最終目標だけは、一度として見失わなかった、という。
- ▶ やはり、一流になる人間は、胸中に不屈の何かサムシングをもっている。ありとあらゆる経験はすべて、彼の意志を鋼のごとく鍛え上げた。そして人に倍する労苦は、そのまま、あふれんばかりの人間の思いやりと愛情に転じていったのである。
- ▶ 自然も、世界も、宇宙も、一瞬として止まってはいない。向上心を失った瞬間から、すでに人生の退歩が始まる。
- ▶ それぞれの胸中に不屈のサムシングをもちながら、「自分とっても最高は、昨日までの自分ではない。これからが本格的な挑戦である」との、はつらつたる気概で進んでいきたい。

「センスがいい人がしている80のこと」有川真由美著から一部抜粋